

大隈重信にとつての歴史認識——井伊直弼評価を中心に

廣 木 尚

ただいまご紹介にあずかりました廣木でございます。まずは、今回のこの大隈祭のご開催をお祝い申し上げますとともに、明治改元から一五〇年という大変大きな節目に当たるこの年に、お話しする機会を与えていただきましたとを心より御礼申し上げます。

私はふだん、早稲田大学の大学史資料センターというところにおりまして、早稲田大学の歴史に関する講義を受け持ったり、あるいは、二〇三二年に完成予定で現在編纂が進められております『早稲田大学百五十年史』の仕事をしたりというようなことをしております。本日、私がこの場に立たせていただいておりますのも、そのような仕事がないだご縁ということになるかと思うのですけれども、一方で、私自身の研究テーマは他にございまして、日本近代の史学史ということを勉強しております。史学史というのはなかなか聞きなれない言葉だと思っておりますけれども、これは歴史学の歴史、より広く言うと、過去の人々が歴史というものをどのように考えていたのか、どのような歴史認識を持っていたのかということを研究する分野になります。現在も、歴史の見方をめぐっているいろいろな政治問題になっ

たり、外交問題になったりということがありますが、そのことの背景には、人によって、あるいは国や地域によって歴史に対する見方、考え方が違うということがあるわけです。それは逆に言えば、それぞれの時代で、また、それぞれの地域で、歴史がどのように考えられていたのか、見られていたのかということに注目すれば、その時代なり、社会なりの特徴を解明できるということではないか、そのような発想で研究をしているというようなわけです。

それで、本日のお話のタイトルは「大隈重信」とさしていただきました。これは今申し上げたような私自身の研究テーマと、ふだん仕事の上で接している大隈重信という人——ここからは大隈さんとお呼びさせていただきますと思うのですけれども——その二つが交わる場所を探ってみようということでありまして、まさに大隈さんがどのように歴史に向き合う人だったのかというところから、その人となりに迫ってみよう、それも、副題にありますように、井伊直弼という安政の大獄で有名な幕末の大老、彼を大隈さんがどう評価していたのかということから考えてみようというお話になります。

大隈さんの歴史認識に関して、昨年この場でお話をされた真辺将之先生の『大隈重信…民意と統治の相克』（中央公論新社、二〇一七年）という本にはこのように書かれています。大隈さんは、歴史の大勢というものに対する確固たる信念を持っていたんだと。「彼の演説は常に長大な歴史の蘊蓄の披露から始まり、それはしばしば聞く者を辟易させたが、しかしそうした歴史の流れの中に物事を位置付ける姿勢は、自らの行動への自信につながっていた」（四四八頁）と真辺先生は書かれています。

あるいは、一昨年、早稲田大学が出しました岩波文庫の『大隈重信演説談話集』、この本の編纂を担当された大日方純夫先生は、その解説で「大隈の議論の最大の特徴は、歴史的なアプローチとグローバルな視点にある。つねに過去からの歴史的経緯を踏まえて現状をとらえ、解決すべき課題を提示する方法をとっている」（二二一頁）と述べてお

られます。このように、大隈さんという人は歴史の流れに対する確固とした思想を持っていて、その歴史の見方に基づいて行動していった人だということなんです。

真辺先生がおっしゃる大隈さんの長大な歴史の蘊蓄の例として、今ご紹介した『演説談話集』から二つの談話と論説をご紹介します。一つめは、「女子教育の目的」（一九〇五年）です。大隈さんは女子教育にも大変関心を持っていたのですが、女子教育の必要性を説くに当たって、ここでは日本の歴史における女性の地位を長々と説明するところからはじめています。あるいは、次の「大戦乱後の国際平和」（一九一九年）の場合はこの語り口がもつとはつきりして、第一次世界大戦後の国際関係について説明するにあたり、大隈さんはわざわざギリシャ・ローマ時代までさかのぼって歴史を延々語っています。このように、大隈さんが歴史に大変造詣が深かったということがこういった語り口からもみとれるわけです。

歴史家・久米邦武との親交

それだけではありません。歴史学、つまり、歴史を学問的に究明する営みについても、大隈さんは大変深いかかわりを持っていました。その一例が、久米邦武という人物との親交です。

先ほど私が史学史を勉強しているということを申し上げましたが、実はその点からも、今日この場に立たせていただいているということを大変感慨深く思っております。といいますのも、これはご存じの方も多いと思いますが、この久米邦武という人、この人は日本の近代的な歴史学者の草分けといえる人なんですけれども、この人も大隈さんと同じ佐賀の出身。それも佐賀藩の藩校、弘道館での大隈さんのすぐ下の後輩に当たる人なんです。この佐賀という

場所は近代的な歴史学の誕生にも深くかかわっている土地ということになります。

久米邦武は一八三九年、佐賀城下の八幡小路というところに生まれています。実は私、昨日、この大隈重信旧宅から八幡小路の久米邦武の生家跡までちょっと歩いてみました。久米の生家跡は、今、歯医者さんになっていましたが、その前に石柱が立っていました、そこに久米邦武と、息子で洋画家の久米桂一郎の名前が刻まれていました。迷いながらでしたけど、ここから歩いてちょうど三〇分でした。近所というほど近いわけではないですが、ごく近い距離に生まれた二人だったということができると思います。

少し先回りしますと、久米は後年、帝国大学、今の東京大学の日本史の初代教授になります。しかし、その数年後の一八九二年、彼が書いた「神道ハ祭天ノ古俗」という論文が、いわゆる「国家神道」や天皇制に関わる神話を否定するものだというふうに猛烈な非難を浴びまして、帝大を辞職に追い込まれてしまうのです。その時、逆境の久米に手を差し伸べたのが、実は大隈さんでした。久米は一八九五年、大隈さんの招きで東京専門学校——もちろん後の早稲田大学ですけれども——の講師になります。久米はとても長生きで、九一歳まで生きますが、早稲田にも二〇年以上在籍して、大隈さんが亡くなった直後の一九二二年三月に退職しています。

ご説明が長くなっているのですが、その久米邦武が、大隈さんが亡くなった後、こんなことを言っています。久米と大隈さんは一八五四年に弘道館で出会っているのですが、その弘道館時代に、久米は、歴史を見る目を養う上で大隈さんから大変重要な指導を受けたといっているのです。当時の藩校の教育といえますと、漢学、あるいは朱子学のような儒学が中心で、歴史の勉強も中国の歴史書を読むのですけれども、そこで久米は大隈さんから、歴史を読むには批評眼を磨くべしといわれたというんですね。これが自分にとって非常に大きかったといっているのです。おもしろいのは、大隈さんもそのことを覚えていて、久米邦武が大学者になった後に「子〔久米——廣木註〕の史学は

我啓発した」——あいつに歴史学を教えてやったのは吾輩だ——と言ったというんですね。こういうふうにはおもしろおかしく回想しているのです（久米邦武「序」『大隈侯八十五年史』、一九二六年、五十六頁）。

ちなみに、もう一つエピソードをつけ加えますと、この久米邦武が一躍名を知られるきっかけとなったのが、一八七一年から七三年まで、かの有名な岩倉使節団に随行し、その記録である『米欧回覧実記』という書物をまとめたことでした。そして、実は、この岩倉使節団にも大隈さんは深いかかわりを持っていました。というのは、この使節団の派遣構想は、大隈さんの学問の先生でもあったフルベッキという、当時、政府のお雇い外国人だった人物が、一八六九年に大隈さんに提出したブリーフスケッチという文書が発端になったとされているからです。フルベッキはこのブリーフスケッチの中で、使節を派遣する際には、単に外交交渉をするだけではなく、訪問した国々の法律・財政・教育・軍事・宗教政策等々のことを調査して、その記録を編纂して出版するのがいいといっています。このフルベッキの提案が実現したのが岩倉使節団であり、久米がまとめた『米欧回覧実記』ということになります。大隈さん自身は使節団を率いて海外に行くということにはなかつたのですけれども、このように久米邦武にも、そして日本の近代歴史学の出発点にもかかわっていたということになるのです。

『開国五十年史』にみる歴史観

では、歴史学とも深いかかわりを持つ大隈さんの歴史観とはどのようなものだったのでしょうか。それを、ここでは大隈さんが晩年に監修した『開国五十年史』上下（一九〇七～〇八年）という本の中に探ってみたいと思います。

『開国五十年史』は、文字通り開国から五〇年間のさまざまな分野における日本の発展を六〇項目以上にわたって

書きあらわしたものです。特筆すべきは、各項目を、例えば徳川慶喜に幕末の回想談を語らせたり、伊藤博文は憲法、山縣有朋は陸軍というように、その当事者に書いてもらっているところなんですから、この本の冒頭に、大隈さんは「開国五十年史論」という七六頁に及ぶ長大な文章を載せています。また、末尾にも「開国五十年史結論」というのを書いていきます。この長大な「史論」は、日本の歴史を、開闢から天智天皇の時代までの「古封建時代」、そこから平氏政権までの「過渡時代」、さらにそこから開国までの「新封建時代」というように三つの時期に区分して、その発展過程を説明するという日本通史になっています。開闢から現在までの日本の歴史をずっと見てきた上で、大隈さんは視点を一気に開国後の時代にフォーカスして行って、開国後の日本は急速に東洋の自由および文化の中心になったといっています。

その一方で大隈さんは、日本がそのように急速に発展できた理由は、ずっと昔からの日本の歴史に由来するのだともいいます。どういふことかというところ、

太古より吾人が誇る所の大和民族は、幾多の人種聚まりて混合したるものなるが上に、其特色は早く自由主義の萌芽を有し、外来の習慣、法律、宗教、文学に調和するの性を具へ、是等の事物を外国より輸入するや、直に之を咀嚼して我に同化したる
 (『開国五十年史』上巻、七四―七五頁)

というのですね。大和民族は、自由主義的で、外来の文物のいいところを取り入れて吸収する力にたけている、長い歴史を通じてそういう力を養ってきたのだ。だから、開国後も急速に発展できたのだというわけです。

はたして本当にそう言えるかどうかは、いろいろ意見の分かれるところだと思いますが、いずれにしても、大隈さんはこのように歴史を捉えた上で、

我国は既に東洋の文明を代表すべき位置に達し、更に西洋の文明を東洋に紹介するの天職を有する者なるが故に、東西両洋の文明を融和綜合して、一層世界の文明を向上せしむることは、一に其使命なることを自信せざるべからず（下巻、一〇五七頁）

と、日本は東西両洋の文明を融和・綜合して世界の文明をより一層向上させる使命を持つているのだと説いたのです。いうまでもなく、この東西文明の調和は、晩年の大隈さんが取り組んだ非常に大きなテーマであり、大隈さんの遺著にもこの『東西文明の調和』というタイトルがつけられることになるのですけれども、このような課題も大隈さんの日本の歴史に対する該博な知識に基づいて導き出されたということがおわかりいただけるかと思います。

横浜開港五十年記念祭と井伊直弼銅像の建立

ここまで大隈さんの歴史の見方を少しご紹介しました。開明的、進歩的といわれる大隈さんの政治的なスタンスも、こうした歴史の見方と大きく関係しているということがご理解いただけたのではないのでしょうか。

その上で、このような大隈さんの歴史に対する向き合い方と、その人となりというものがよくあらわれている出来事として、次に、明治も終わりに近づいた一九〇九年、ちょうど今ご紹介した『開国五十年史』が出版されたのと同じころですが、そのころに行われた横浜開港五十年記念祭、それと、そのとき合わせて作られた井伊直弼の銅像——これは横浜の桜木町からほど近い掃部山公園というところに今もあります。これらと大隈さんのかかわりについて少しお話しさせていただきます。と思います。

まず、この開港五十年祭についてですが、これは、一九〇七年一月に『横浜貿易新報』——今の『神奈川新聞』の

前身にあたる新聞で、当時は大変有力な新聞でした——が、二年後の開港五〇周年を期して開催を提唱したということに始まります。開催日は日米修好通商条約が結ばれた七月一日と定められました。

この計画に大隈さんも賛同しまして、記念祭の開催に先立って横浜経済会というところの例会に出向き、応援とアドバイスを兼ねた演説しています。その演説で大隈さんは、東京の神田祭、山王祭といった有名な祭の例を引きながら、祭というものは——この大隈祭もそうだと思いますが——その町やそこに住まう人々にとって大変重要なものと述べた上で、横浜市も開港五十年祭を盛大に行うべきだとアドバイスしたのですね（『横浜貿易新報』一九〇九年三月一一日）。

一方、そのころこの開港五十年祭をめぐる、もう一つの計画が進められていました。それが桜田門外の変で暗殺された幕府の大老・井伊直弼の銅像を建立しようという計画です。日米和親条約を締結した井伊直弼こそが横浜開港の恩人だということで、その家臣だった旧彦根藩の士族有志が、かつての主君の名誉回復を図って、横浜の戸部不動山——これが先ほどお話しました今の掃部山公園になるのですけども——そこに土地を確保して、完成したらそれを市に寄付するということまで決めて進めていたのでした。

その後、この銅像は、一九〇九年六月二六日、無事竣工しまして、除幕式は開港五十年祭と同じ七月一日に行うということになったわけです。出来上がった銅像については、『横浜貿易新報』も「横浜の名物が一ツ殖えた」なんていう鉄道客の声を紹介したりと好意的に報じています（『横浜貿易新報』一九〇九年六月二三日）。また、除幕式には来賓として、大隈さんをはじめ、伊藤博文、山縣有朋、大山巖、井上馨、そして松方正義といった諸元老に、各省の大臣その他、約三〇〇名を招待する手はずだということのようなことも報じられ、盛大な国家的イベントとして執り行おうとしたことがわかります（『横浜貿易新報』一九〇九年六月一九日）。

そのような経緯で準備が進められ、開港五十年祭の方は一九〇九年七月一日から五日の日程で挙行されました。官民合同の祝賀会に加え、海上では各国の艦船が満艦飾を施して祝砲を放つ、イルミネーションやフラワーモールが町を飾り、そこを仮装の大名行列や提灯行列、山車や神楽に、芸妓さんが舞い踊りながら通りを行き交うなど、まさに盛大に祝われたわけです。また、関連事業として、開港記念会館の建設（これは一九一七年に竣工して、その後、関東大震災でかなり崩れてしまっただけでも、修復、復元されて今もあります）、あるいは『開港五十年史』という年史の出版であるとか、記念絵葉書の作成、史料展覧会の開催といったことも行われたということなんです。このように開港五十年祭の方は無事、というよりも予想以上の盛り上がりを見せたのでした。

銅像除幕式の延期

ところが、その中であって、井伊直弼像の除幕式の方は、予定より一〇日おくれの七月一日に延期となってしまうのです。

なぜ延期されてしまったのか。その内幕が『東京日日新聞』という、当時比較的政府寄りとみられていた新聞ですが、そこに掲載されています。それによると除幕式の延期は、当時の政府の実権を握っていた、そして、先ほどの『横濱貿易新報』の記事では銅像の除幕式に招待することが計画されていた元老たちの妨害の結果だということです。長州出身の伊藤博文とか、井上馨、あるいは薩摩出身の松方正義といった元老たちからすれば、井伊直弼という人は、安政の大獄で吉田松陰や西郷隆盛といった恩師や同志たちを弾圧した極悪人であって、そんな人物の銅像を横浜開港の恩人だといって建立するとはけしからんということで、元老たちは怒ってしまったということなのです。そして、怒

るだけではなく、除幕式を中止しろと迫ったと『東京日日新聞』は報じているのです。当時の神奈川県知事は周布政之助という人で、長州出身の人だったのですが、この人は元老と地元の間で板挟みになってしまつて、出身地に逃げたしまつたというようなことまで書かれています。元老の意向というのがどこまで事実なのかは判然としませんが、いずれにせよ、このような妨害があつて、主催者としては仕方なく、除幕式を延期し、開港五十年祭と日取りをずらして実施することにしたということなのです（『東京日日新聞』一九〇九年六月二七日）。

井伊直弼像除幕式と大隈演説

ともあれ、アクシデントに見舞われながらも、井伊直弼像の除幕式は行われます。当日は掃部山に出店が出たり万国旗が翻るなどにぎわいを見せました。ただ、今お話ししたようないきさつから元老や大臣の出席はありません。その中で、招かれた元勳の中で唯一、出席したのが大隈さんだったのです。『横浜貿易新報』は、そんな大隈さんに観客一同、大喝采を浴びせたと伝えています（『横浜貿易新報』一九〇九年七月二四日）。大隈さんの人気のほどが伺える場面でもあります。

さて、その除幕式で大隈さんは祝辞として大変長い演説を行います。ここは非常に大事な部分ですので、少し長くなりますが、原文をご紹介します。

諸君、今日は吾人の最も敬慕する処の井伊直弼朝臣の銅像除幕式に列しまして、此国に取つて記念とすべき偉大なる人傑に対し、聊か一言を述べるのは私の最も光榮とする所であります（「最も希望する所なり」と呼ぶ者あり）此に祝辞を述べるに先

立つて、私は甚だ遺憾とすることの一言を述べるの已むを得ぬ不幸に出遭つた。当月一日は、恰も安政六年六月二日、陽暦の千八百五十九年七月一日、丁度此七月一日が、凡そ半世紀を経過した日本が世界に生れて、半世紀の記念日である、日本の国家が世界に生れてから、五十年を経過した、日本帝国に取りて最も大切な記念日である、此記念日に、吾々は此除幕式のあること、信じて居つた、然るに如何なる御都合であつたか、其日は到頭除幕式が出来なかつたと云ふことを、私は甚だ遺憾に存するのである、(最も同感と呼ぶ者あり)併し斯の如く過去つた愚痴を此祝典に述べるのは、甚だ礼を失する訳であるが、私の感情は、沈黙せんとして沈黙する能わぬ、(「謹聴々々」と呼ぶ者あり)因りて此席をも顧みず先づ此事を一言したのである。(大隈重信「式辞」『故井伊直弼朝臣銅像除幕式之記』一九〇九年)

まず、大隈さんは井伊直弼について、「吾人の最も敬慕する処の井伊直弼朝臣」とわざわざ述べて敬意を表しています。それに加えて、除幕式が延期させられたことにも触れて、「甚だ遺憾」だと、開催を妨害した元老たちを暗に批判しているのです。実は引用していない部分では、大隈さんは井上馨や伊藤博文が幕末、開国派としていろいろ奔走して、殺されそうになつたりして大変だつたんだなどというエピソードを話して、揶揄したりもしています。

その上で本題に入るわけですが、大隈さんは、次のように述べています。

凡そ世界の文明に後れた国が、進んだる文明の力に触れるや否や、其国を開くには、必ず戦争の後に開くのである、戦敗れて、^(余義なく)余義なく国を開くのである、(中略)其結果多くは其国家が衰亡する、所が幸に日本は、戦争の後に国を開かずして、平和の間に事を了した、其過渡の時代に非常なる困難に出遭ふと、天英雄を降して、此困難を解決する所の人傑が生ずる、然らば平和の下に国を開いたと云ふのは誰であるか、是が今日諸君に向つて私の言はんとする所である(「謹聴々々」の声盛に起る)そこで世の中に某は開港家なり、某は鎖港家なり、攘夷家なり、開港家は沢山外に人があつたと云ふ、斯ふ云ふ議論があるが、全体開港家と云ふものは、日本にはないのである、尽く攘夷家である、何故に攘夷家であると云ふと、一向世界の大勢を知ら

ない、知らないから攘夷家である（同右）

外国の事情を知らぬ者は攘夷と云ふ、愚図々々云へば首を斬れと云ふ、此等の事情が当局者には直ぐ分つた、阿部伊勢守堀田備中守は分つたが、誠に錯綜した事情の下に、其考を断行することに余程躊躇したのである、そこで井伊大老は之を断じたと云ふのである。凡そ政治家の最も貴ぶ所ものは、難に臨んで断ずると云ふことである、（拍手喝采）最早条約調印の已むを得ぬと云ふことは、全国皆知つて居るのである、併ながら其決行者がないのである、そこで私が国難に臨んで天英雄を生じ、此英断を為したと云ふ、其間に多少の波瀾はある、安政の獄とか、其他多少の小波瀾はあるが、是は小波瀾である、国難を定めて平和の下に永久の開港の基を開いたのは、何としても国民が永く忘るべからざる所の大功を、井伊公に帰するに少しも躊躇しないのである、（拍手喝采）……（伯の演説と此銅像は万古不朽に残る」と呼ぶ者あり）（同右）

大隈さんは井伊直弼を、攘夷派を恐れずに開国を断行し、平和をもたらした英雄であるとはつきりいきりました。それに対し会場からは「伯の演説と此銅像は万古不朽に残る」との呼び声が拳がったといひます。非常に盛り上がった様子がわかります。

当時の幕閣の苦悩を代弁したくだりなどは、かつて外務大臣として不平等条約の改正交渉に臨み、テロで片足を失うことになった大隈さん自身の経験も投影されているように思えます。それにしても、安政の大獄を「小波瀾」だと、大したことではないと言つてのけるあたりも含めて、この一連の大隈さんの言葉は、元老たちの憤激を恐れずに信念を貫く姿勢が非常によくあらわれている、大隈さんらしい物言いだと思ひます。

井伊直弼という人は、今も時代劇などで敵役として出てくることが多い人です。当時も、やはり一般に不人気な人物だったと言つていいでしょう。大隈さんというと民衆政治家というイメージがあつて、それは非常に人々に人気

あつた政治家であるということとともに、意地悪な見方をする人からすると、大衆迎合的というか、ポピュリストのように評されることもあるのですが、今ご紹介した、井伊直弼を開国の恩人、英雄とする評価、これは井伊直弼の不人気ぶりを考えれば、単なる人気とりではできない、確固とした歴史認識、思想というものがなければできない評価だったということがいえると思います。

「開国家」としての大隈重信

それでは、次に井伊直弼評価にあらわれているような、大隈さんの確固とした思想・認識がどのようにして育まれたのかということを考えてみたいと思います。それについては、一つの淵源はやはり佐賀時代以来の、大隈さん自身が「開国家」となっていく経緯に求められるのではないかと考えられます。そのあたりのことを四点ほどご指摘したいと思います。

まず一点目は、これは言うまでもなく佐賀藩時代に受けた教育の影響です。ご存じのように、幕末の佐賀は西洋の学問、洋学が盛んだつたことで知られていますが、その佐賀藩の蘭学寮であるとか、佐賀藩が長崎に設置した蕃学稽古所——これが後に有名な致遠館となるのですが、そこでフルベッキに学んだアメリカやイギリスの学問の影響というのが大きな意味を持っていたのだらうと思われるわけです。

あるいは、そのことともかわって、二点目として、これは大隈さん自身が後年回想していることですが、佐賀藩時代の優秀な同志からの教えというものも大きな意味を持ったといえます。大隈さんたち若手の藩士の一部が加入していた義祭同盟という、これまた有名な結社があります。この義祭同盟は一般に尊皇派の団体だったといわれますが、

ただ、そのメンバーには幕府の使節に入つてアメリカへ行つた経験のある人物——小出千之助という人が、大隈さんと特に親しかったといわれていますが、こういった人物もいて、大隈さんは彼らから大事なことを教えられたのだと語っています。その教えというものは、要するに排外主義はいけないと、欧米の文明は大変進んでいるのだから、それらの国々と積極的に交流すべきである。平和な交流はお互いにとって利益になるのだから、欧米のいいところをどんどん取り入れていくべきだと、そういうふう^にに教えられた（『大隈伯昔日譚』立憲改進党々報局、一八九五年、五五頁）。そして、大隈さんはだんだん開国派に、尊皇派ではあるけれども、攘夷ではなくて開国派になつていったということなのです。

このように勉強するとともに、三点目として、大隈さんは佐賀時代から諸外国の人々と実際に交際する経験も積んでいます。佐賀藩は長崎御番といつて、江戸時代にヨーロッパとの窓口だった長崎を警護する役割を福岡藩と一緒に担っていました。その長崎で大隈さんは佐賀藩の代品方^{かわりしなかつた}（貿易担当）として外国商人と接触しています。あるいは、幕府がなくなった後の長崎には、短期間、諸藩士の合議体制がしかれますが、大隈さんもその一員として長崎統治に関わり、各国政府との交渉に携わっています。そのような形で、幕末維新期の激動の時代に、大隈さんは諸外国の政府や商人と実際に交渉する経験をもつたのです。その意味では、先ほどまでお話ししてきた横浜開港五十年祭と井伊直弼銅像除幕式での大隈さんの言動は、大隈さんが若いころにかつての外国との窓口だった長崎で得た経験を、新時代の窓口である横浜に受け渡そうとした、そういうエピソードとも読めるわけです。

このように、学問、それと現場経験、そういうものを積んだ上で、これが四点目になりますが、大隈さんは特に英米両国に対する信頼感を培つていったことができます。次にご紹介するのは、先ほど取り上げた『開国五十年史』の一節です。そこで大隈さんは「日本を勧めて世界列国の伍班に紹介したるは米国にして、日本の要求を容れて

列国と対等の国たらしめたるは実に英国なりとす」と述べて、英米両国に対する感謝の念を語っているのです（上巻、七一頁）。大隈さんというと、有名なパークスとの論争とか、あるいは条約改正交渉でも大変強気な外交交渉を展開したということが知られていますが、そのような強気な態度がとり得たのも、理性的に筋道を立てて説けば、相手は理解してくれるという、相手国に対する信頼、より広いいえば、文明に対する信頼というものがあつたのではないかと考えられるのですね。このような、学問と経験に裏打ちされた国際感覚と、そこから培つた異なる文明の調和を重視する思想、そういったものに支えられて、大変不人気な井伊直弼を開国の功労者として評価するような歴史理解も導き出されたのだらうと考えられるわけです。

おわりに

以上、大変雑駁なお話となり恐縮なのですが、これだけでも大隈さんが該博な知識と実体験に支えられた歴史認識を持った人だったということ、そして、その歴史認識が大隈さんの一貫した政治姿勢の基盤になっていたということがおわかりいただけるのではないかと思います。

その上で最後に、大隈さんの歴史への向き合い方、大隈さんにとって歴史認識とは何だったのかということについて、少し私の考えを述べることをお許しただければと思います。

一般に歴史に対する向き合い方には二種類あるように思います。その一つは、謙虚に歴史に学んでみずからの行動や思想を律していくという、一言でいえば歴史に学ぶという姿勢、もう一つは、それとは反対に、自分の都合のいいように、自分の目的に合うように歴史を解釈して、自己正当化のために利用するような姿勢、極端な場合は、事実な

どというものにはお構いなしに、歴史を自己正当化の道具に利用するような姿勢、こういう二つの向き合い方があるのではないかと思います。

もつとも、その二つの向き合い方は、一見して見分けるのはなかなか難しい。それに、ゼロか一〇〇かということでもないと思います。気をつけていても自分に都合のよい解釈が混じってしまうことは誰にでもありえます。

ただ、その上であえて乱暴に、大隈さんの歴史への向き合い方はどちらだろうと考えますと、やはり一番目の歴史に学ぶという姿勢、間違いなくこちらだろうと思うのです。その根拠として、今回、このお話を準備する中で出会った大隈さんの言葉から、もう一つ取り上げたいと思います。

それは、さきほどご紹介した横浜経済会例会での大隈さんの演説、大隈さんが応援とアドバイスの演説をしたとご説明しましたが、その中の一節です。そこで大隈さんは井伊直弼銅像の建立とあわせて、井伊家が当時所有していた外交文書——井伊直弼が外交を担当していた当時の文書が井伊家にあるのですね——これを収めた「外交文書図書館」を建設し、横浜市に寄付しようという計画があることを紹介しています。その上で、大隈さんは、この図書館が完成すれば、日本人にとって重要な歴史の参考となる資料、ひいては、「世界先進国」が日本を研究する上で、もつとも必要な材料となる資料を提供する貴重な施設になるだろうと、大変大きく評価しているのです。しかも、大隈さんはさらに、井伊家の文書を核にして、ローマ、オランダ、ポルトガルなど世界各国に残存する日本関係資料を蒐集してその図書館に収めれば、「銅像と共に横浜港頭を飾るべき世界的奇蹟の一に数へらるゝなるべし」と、そのような提言までしているのです（前掲『横浜貿易新報』一九〇九年三月二一日）。

結局、「外交文書図書館」を作るという計画自体は実現しませんでした。井伊家の資料は、その後、東京大学史料編纂所で編纂されて、『幕末外国関係文書』という形で出版されることとなります。

ただ、ここで重要なのは、大隈さんがこの時代に「外交文書図書館」が必要だと主張したこと自体にあります。外交文書を収集・整理して、国民のために公開する。今風に言えば公文書管理と情報公開ということです。これは今でも取り組みの不十分さがしばしば指摘される事柄です。今だって十分にはできていないことを、大隈さんは約一一〇年前に言っている。私はこの演説の記録に出会って大変驚きました。明治時代の著名な政治家でこういうことを言った人は他にいないのではないのでしょうか。この点からも、大隈さんの歴史認識が決してひとりよがりのものでなかったということがわかります。大隈さんは、正確な資料、事実に基づいて歴史を考えようとした人だった。過去の事実に照らしてみずからを律し、その上で、将来の指針を見出そうとする人であったということを良く示している発言だと思うのです。

また、それに加えて、大隈さんがこの演説で、外交文書を公開し多くの国民の参考にするべきだといっていることは、政治家・大隈重信を評価する上でも重要な意味を持つと思います。というのも、大隈さんがここで言っているのは、国民が国家の運営を誰か担当者にお任せするのではなくて、国民一人一人、私たち一人一人が、「外交文書図書館」などを活用しながら、勉強し、考えて、担っていかなければならないということだからです。国民に国家を運営する責任とそのための努力を求めるこのような発言からも、大隈さんが決して単なる人気とりの政治家ではなかったということがみえてくるのではないのでしょうか。大隈さんは、ある意味では、歴史学者以上に、歴史というものを重視する姿勢を持っていた方だったのではないかと思うのです。

いろいろ述べさせていただきました。歴史が大事だと繰り返し返して、まるで自分の専門をアピールしているようなことになり恐縮なのですが、決してそればかりではなくて、私自身、こういった大隈さんの態度、考え方から日々学ぶところが多いのです。今日はその学びの一端をご紹介させていただいたということになります。このような大隈

さんの歴史の見方に今後也大いに学んでいきたいと、そのような決意を述べさせていただきました、私からのお話を
終えさせていたただきたいと思います。

ご清聴どうもありがとうございました。

主要参考文献

- ・ 佐藤能丸「井伊直弼銅像問題」(『同志社法学』五九―二、二〇〇七年)
- ・ 阿部安成「横浜開港五十年祭の政治文化―都市祭典と歴史意識」(『歴史学研究』六九九、一九九七年)